



中四国いふあ めへしおん

企画・発行 日本赤十字社中四国ブロック血液センター 学術情報課 Tel 082-241-1619
協力 中四国ブロック内各赤十字血液センター

2022年4月
第44号



コロナ禍での「梅毒患者数の増加」をご存じですか？

梅毒は代表的性感染症であり、日本では戦国時代から続いているが、予防・治療の進歩から感染者数はかなり低い水準に保たれていた。2000年からの感染者数の推移を図に示すが、2013年あたりから増加に転じている。梅毒は感染症法では5類の全数把握対象疾患に定められており、診断した医師は保健所に届け出ることが義務化されているため、梅毒患者数の動向は容易に把握出来る。血液事業においても献血者の梅毒検査は必須であり、感染既往のある人からの採血は不可となっている。

なぜ2013年以降増加傾向にあるのか、なかでも新型コロナ感染症の大流行のさなか2021年は過去最高の感染者数を示すようになってきたのか、さまざまな要因が解析されつつある。予防治療が可能な感染症であることから、これ以上の感染者増加を防ぐための、特に若い世代の梅毒に対する正しい知識と理解が必要である。

図からわかるように男女ともに同程度の増加を示しており、2021年の感染者年代別分布から、男性は20～40代で75%を、女性は20代が全体の約55%を占めている。異性間性交渉が感染の主因であり、特に若年女性の感染者増が全体の感染者増加に影響している可能性が高い。都会ほど感染者数が多いのも特徴である。中四国各県の過去5年の患者数を表に示すが、広島・岡山に継いで四国地方が多い傾向にある。

2013年からの動向は新型コロナ感染症前から注視されており、広島では急速に伸びたインバウンドの増加が感染者の急増に起因していると考えられていた。コロナ感染に伴い、海外との往来の激減から2020年に感染者数が低下を示し、これで梅毒感染の増加は以前の数に落ち着くであろう事を予測していた。ところが2021年に過去最高数を示す結果となり、国内での感染流行が明らかとなり、蔓延防止の策が迫られているのである。

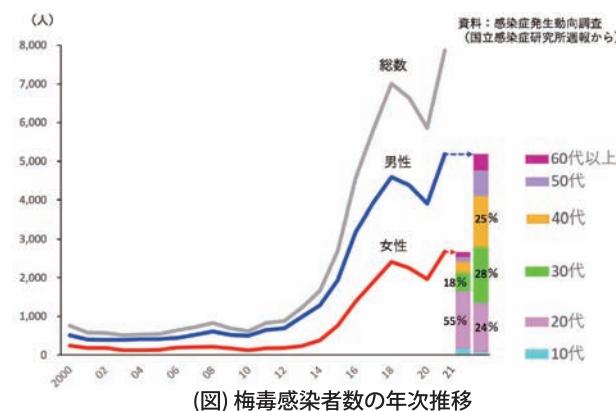
梅毒感染症の特徴（下欄参照）から、早期の診断と治療開始は難しい。概ね3か月くらいの潜伏期間があるとも仮定でき、感染者数増加の一因と推測されている。治療はペニシリン系抗菌薬の内服が基本で、3～4週間の継続内服が必要であることから、確実な治療完遂が出来ているかは危惧されていた。諸外国では持続性ペニシリソル筋肉内注射薬の単回投与が標準的治療であり、ほぼ100%の効果が得られている。日本でも梅毒患者増加に伴い、2021年秋に梅毒治療薬として筋肉注射薬（ステルライズ®）が薬価収載され、今後の治療効果、感染予防に期待がもたれている。

梅毒感染を含めた性感染症の予防には正しい病気の理解が必須である。血液事業においても梅毒感染者増加は、特に若年献血者数に少なからぬ影響をおよぼしかねない状況であることから、感染者動向に注視するとともに、しっかりと対策への啓発、努力が必要である。

（日本赤十字社中四国ブロック血液センター 所長 小林正夫）

梅毒の診断と病期

梅毒トレポネーマという病原菌による感染症である。症状は感染してからの時期で第1期から第4期に分類され、第1期は感染後3週間前後で現れる症状で、感染した部位（口や性器）の硬いしこり（硬結）やただれがみられるが、この段階で梅毒を疑うことは非常に難しいと言われている。第2期は感染後3か月後くらいに病原菌が全身に拡がり、バラ疹（バラの花のような湿疹）が全身にみられ、粘膜症状、倦怠感や発熱が出てくる。多くの方はここで医療機関を受診し、診断され治療が開始される。適切な治療が行われれば第3期、第4期にいたる患者さんはほとんどいない。放置すれば大動脈瘤、神経梅毒、肉芽腫など多彩な症状となり、死にいたる場合もある。妊娠の梅毒感染は流産や死産、新生児の先天異常がもたらされるので、適切な診断と治療が必須である。



（表）中四国各県の感染者数

	2017年	2018年	2019年	2020年	2021年	5年間合計
鳥取県	8	27	23	32	13	103
島根県	5	14	9	18	9	55
岡山県	169	158	187	161	159	834
広島県	138	176	134	127	187	762
山口県	22	62	60	28	48	220
徳島県	14	29	30	23	23	119
香川県	64	30	52	67	70	283
愛媛県	40	75	82	59	75	331
高知県	22	18	20	35	95	190
中四国合計	482	589	597	550	679	2,897
東京都	1,771	1,759	1,693	1,559	2,437	9,219
大阪府	833	1,186	1,086	891	852	4,848
全国	5,826	7,007	6,642	5,867	7,875	33,217

資料：感染症発生動向調査（国立感染症研究所通報から）

令和3年度赤十字血液シンポジウム(中四国ブロック)開催によせて

令和4年1月22日(土)、メイン会場を岡山国際交流センター、サテライト会場を愛媛県・高知県赤十字血液センターとし、ハイブリッド形式で「令和3年度赤十字血液シンポジウム(中四国ブロック)」が開催されました。赤十字血液シンポジウムは毎年開催されており、今年度の共催センターは我が鳥取県赤十字血液センターのため、所長を筆頭とした面々で“汽車”(電車ではありません!)に乗り込み、日本海から中国山地を越え、瀬戸内海に面する岡山県にやって参りました。このご時世ですので新型コロナウイルスの影響も心配されましたが、何よりの懸念事項は積雪による汽車の運休でした。なぜなら、そう、鳥取は瀬戸内沿岸や太平洋側の各県と異なり雪国なのです。開催数日前から天気予報や汽車の運行情報を固唾を呑んで見守る中、何とか無事(雪かきのための途中停車がありつつも)運行され胸を撫で下ろしたものです。

当日の内容は下記のとおりであり、ご高名な先生方をお招きし、鳥取県赤十字血液センターならびに中四国ブロック血液センター所長を座長に据えて、「感染症と血液事業・輸血医療」をテーマに多方面からのアプローチでご講演頂きました。



第1部 座長:縄田隆浩 (鳥取県赤十字血液センター 所長)

- ◆講演1 輸血後細菌感染の現状と今後の安全対策
後藤直子 (日本赤十字社血液事業本部 技術部 安全管理課長)
- ◆講演2 我が国における輸血感染症対策の歴史
—地域病院での輸血による感染症の状況からみた輸血用血液の安全性の向上—
稻葉頌一 (特定医療法人茜会よしみず病院 総院長)

第2部 座長:小林正夫 (日本赤十字社中四国ブロック血液センター所長)

- ◆講演3 造血器腫瘍診療の進歩
福田哲也 (鳥取大学医学部附属病院 血液内科 教授)
- ◆特別講演 回復者血漿療法 新興感染症に対する治療の選択肢
新型コロナウイルス感染症での研究を踏まえて
忽那賢志 (大阪大学大学院 医学系研究科・医学部 感染制御学講座 教授)



年明けと共に新型コロナウイルス オミクロン株の感染が急拡大したこともあり、開催方式について直前まで協議が重ねられる中、感染対策を厳重にしたうえ、無事予定通り現地参加+WEB視聴型であるハイブリッド形式で行うことができました。ご講演・ご聴講いただきました先生各位に、この場をお借りして御礼申し上げます。

岡山から鳥取に向けた帰路の汽車の車窓からは、川端康成「雪国」における著名な書き出し“国境の長いトンネルを抜けると雪国であった”を彷彿とさせる冴え冴えとした雪化粧の美しい山間、或いは東山魁夷「清晨」と見紛うばかりの光景が広がっていました。温暖な地方ではまず見ることの出来ない、この地方、この季節だけの光景を是非多くの方に見ていただきたいなあと思ったものです。

(鳥取県赤十字血液センター 学術情報・供給課 森唯)